

## 三間英樹（2014年度日本英語学会賞（著書）受賞）

拙書 "Patterns and Categories in English Suffixation and Stress Assignment: a Theoretical and Quantitative Study" に対して 2014 年度の日本英語学会賞（著書）を頂きまして、誠にありがたく存じます。お忙しい中審査にあたっていただいた先生方や事務局の皆様方には、心より感謝を申し上げます。また、これは基本的に 2012 年に筑波大学に提出した博士論文ですので、指導に当たっていただいた山田宣夫先生をはじめとする審査委員会の諸先生にも感謝いたします。

これは、英語のさまざまな接尾辞が持つ強勢パターンについて、包括的な調査に基づいて分布を記述すると同時に、その分布自体を理論的に予測することを試みた研究です。英語の中に複数の強勢パターンがある、という問題には、20 年以上前に大学院に進学した頃から興味を持っておりました。当時は語彙音韻論という枠組みが（問題点を指摘されつつも）主流で、また韻律理論が隆盛を極めていました。しかしどのような分析を行っても、必ず例外的な扱いが生じてしまうことに釈然としない思いを抱いていました。また、さまざまなパターンがどのような分布をしているかという問題については、具体的な調査がないばかりか、そのような問いさえ持たれたことがないような状況でした。

そんな中、1997 年と 2002 年に発表された Arto Anttila の二つの論文にとっても大きな刺激を受けました。それらは、一つの言語の中に制約のランキングが決まってない部分があり、その未決定の部分が複数の文法を生み出し、またパターンの多寡にもつながる、とするものだったからです。早速その理論に基づいて英語の強勢を分析し、分布の予測をたて、ひたすら地道に調査を進めました。それは調査に 5 年、執筆も含めると 8 年に及ぶものになりました。ありがたいことに職場から半年のお休みをもらい、Anttila のもとで研究する時間を得ることができたことは、論文を完成させる上で非常に有益でありました。

他の分野でもそうだと思いますが、音韻の面においても英語にはまだまだ未解明の謎が残されています。しかしそれらは、地道な量的研究と思慮深い質的研究の両面を通してゆっくりと解き明かされていくのだらうと思います。自分もその解明のプロセスに少しでも貢献できるよう、これからも研究を進めて行きたいと思います。